

# 大正・昭和初期における生活の 洋風化に関する一考察

——商家の棚卸決算簿を通して——

内 田 直 子

## 1. はじめに

その時代の生活状況をみる時、手段として家計調査などによる数量的資料、写真、風俗画、新聞・雑誌などのビジュアル的資料が手がかりとなる。しかし、それは、平均値が示す当時の主立った生活像、または時代の最先端を示すだけの片寄った場合のものなどが多い。また地方都市に関してはさらにその扱いは限られたものになってくる。

本稿では、木更津で足袋業を始め、のちに唐物屋に転身した一商家（以下『A商店』とする）の大正から昭和初期の棚卸決算簿を資料として、当時の地方都市の25年間の衣服並びに一般生活の洋風化への変容をみることを試みた。

大正時代の庶民の着装状況を知るものでは都内では今和次郎<sup>1)</sup>氏、地方では小樽の大町敏子、名取まつ子<sup>2)</sup>両氏による路上での数量調査があり、家計簿資料から長期にわたる消費者サイドの生活を検討する研究は、多田吉三<sup>3)</sup>氏、横山光子<sup>4)</sup>氏、宮下美智子<sup>5)</sup>氏、後藤和子<sup>6)</sup>氏、御船美智子<sup>7)</sup>氏の分析にみられる。

しかし、大正から昭和初期の頃を特定した庶民の衣生活指標となる小売りサイドの資料は僅かである。百貨店などの大規模店は社史、経営史など各社様々見られるが、一個人店レベルになると、その実態は明らかにされにくく、極めて少ないことから、この資料は当時の一地方の生活を知る上で貴重な資料と考えられる。

## 2. 唐物屋とは

本資料で称する「唐物屋(とうぶつや)」とは西洋衣料を販売する小売店の<sup>8)</sup>ことであるが、そもそも「唐物」とは、古代9世紀に中国から舶載した品物の<sup>9)</sup>ことである。

17世紀にできた唐物屋は、長崎で取引する西洋や東洋の品物、例えば道具類、香料、革、紙、薬、墨、筆などを扱っていた。<sup>10)</sup>

「唐」の意味は、最初は中国のことだけだったのが、明治期、外国人のことを『毛唐人』<sup>11)</sup>といていたことを考えると、それ以前より「唐」は中国だけでなく、外国全般を意味しているように思われる。そのため、「唐」という言葉を用いながら、内容は中国の物だけでなく、西洋の物も扱っていたのではないだろうか。

明治時代以降は別名「西洋小間物店」というように、欧米各国の服飾品、衣料、帽子、化粧品、洋酒、手提げ鞆などを扱っていたが、明治の終わり頃からは洋酒類を除いた物を扱い、昭和初期以後は「洋品店」というようになった。<sup>12)</sup>

実際、綿布が多かった時代から、丈夫で暖かいメリヤス、フランネル、コールテン、あるいは毛織物やラシャといったセル・サージ・ギャバジンのような布地の需要が増え、和装から洋装へと着るものも世の移り変わる需要に応え、唐物屋も繁昌した<sup>13)</sup>といわれている。

## 3. 研究資料について

本研究資料のA商店の棚卸決算簿とは、現在の千葉県木更津にあったA洋品店の店主A氏による、大正5年から昭和15年までの25年間の商品の棚卸の記録簿である。

形式は、半紙横半分折のいわゆる奉加帳形式の手製のもので、毛筆の縦書きで記してあり、全25年間の総頁数は、862頁(表紙を含む)、各年平均34.5頁となる。

記載内容は、「棚卸之部」(図1)に在庫商品名とその商品金額の合計と個



大正2年に結婚し大字木更津（現在の木更津市中央）に分家した。最初は足袋製造業（いわゆる足袋職人）と衣料品店の販売業をしていたが、大正14年から洋品を主体とするようになり、唐物屋に転身し、昭和2年より「A洋品店」と称した。

A商店は現在の木更津市中央の地区に位置するが、ここは当時木更津町の南片町といていた。南片町を述べる前に木更津市の概要からみると、現在の「木更津市」となったのは昭和17年のことである。明治22年に市町村制が実施され、木更津、貝淵、吾妻の三村を合併して「木更津町」ができた。そして昭和8年に真舟村を合併し、同17年に木更津町、清川村、巖根村、波岡村が合併して木更津市になった。昭和8年の「木更津町」の面積は9.3(km<sup>2</sup>)<sup>14)</sup>である。<sup>15)</sup>

昭和初頭の「木更津町」の商業についてみると、この木更津は上総第一の商業地で、また同時に漁業の町でもあった。君津郡における貨物の集散地で、郡内に産出する主な商品の穀物類、薪炭、木材、竹材、海産物、蔬菜、梅干し、醤油、鶏卵などをここに集め、京浜地方やその他に移出し、逆に京浜地方からは雑貨、呉服類、肥料、金物、日用品などを移入し、郡内に売捌いていた。商業の発達<sup>16)</sup>が盛んな土地故、金融業者も目立っている。

A商店があった南片町は商業地だけに近所はすべて商売関係で、A商店の周囲は旅館業が多く、その他、小間物屋、呉服屋もあり、同業者も見受けられる。<sup>17)</sup>A商店は木更津の中心地で商売を営んでいたことがわかる。A商店の周囲にある大きな通りの「浜通り」や「大通り」は、駅からは離れていても、海からの出入りもあることから、駅前商店より活気がないということはなく、木更津町全体が陸と海との両方からのルートで商業が盛んであったと思われる。

## 5. A商店の各年の状況

棚卸決算簿にある「棚卸之部」の商品と「資産・負債之部」の項目をもと

に、商店の状況を各年ごとにみていく。尚、「資産・負債之部」は内訳として、得意先売掛代金、時貸、不動産、預貯金、株式投資・債権、商品原価見積、その他機械類、自転車などの生活必需品が記載されている。

〔大正5年〕

「資産」の中にミシンが4台あり、合計320円であるが、当時ミシンは輸入品であり、かなり高価なものである。320円の内訳として「縫付ミシン」110円、「廻しカラミ」120円（これは甲馳縫付用と思われる）、「テーラー」70円、「一番（※）ミシン」20円〔（※）は解読不可能〕、と記されている。また「資産」として記載されていると同時に「負債」にも「ミシン未払い分」とある。当時大卒初任給が<sup>18)</sup>45円であることから、このミシンの値段的価値がうかがい知ることができる。また、明治28年（1895年）に福助足袋会社が輸入ミシンを改良して「爪先縫いミシン」を考案し、従来<sup>19)</sup>65過程あった手工業形態を大量生産方式に切り替え、相当効果をあげたという。この商店でも月賦をしてまでも生産の合理化を図ろうと、ミシンを必要としたことがわかる。その他、自転車が「資産」に記載され、現代の自動車並の扱いであったことが推測される。

〔大正6年〕

ミシンが1台増えた。そして「資産」に「白米5俵30円」とある。他者との取引関係で記されているのか不明だが、大正元年「米価狂騰」、4年「米価調節令」など相場が安定しない社会状況<sup>20)</sup>なれば、白米5俵も十分資産といえようか。

〔大正7年〕

7年は「玄米4俵36円」。

〔大正8年〕

ミシンがさらに1台増え計6台となる。棚卸決算簿の記録者A氏が生命保険をかける。また初めて不動産関係のものとして倉庫に敷金を払っている。この倉庫は「土蔵」であったことが記されている。

〔大正9年〕

ミシン類が7台になり「ポンス」が購入された。ポンスとは足型裁断機のことである。足型を全部手裁ちとすると、底裁ちは普通250足／日であるが、ポンスだと1,800足／日可能であり、足袋の産地・行田では、明治36年から実施されていた<sup>21)</sup>。個人経営のこの商店も、ようやく機械化してきたことがわかる。

〔大正10年〕

田面通りに支店を出した。また大正8年に敷金を払っていた倉庫もこの年3,700円で土地も含めて購入した。自転車も2台となる。

〔大正11, 12年〕

この頃は原材料を購入しての仕立物と仕入れ販売の両方から経営を行っていた。

〔大正13年〕

この年から「台湾電力・50株・1,665円」と株式投資を始めている。取扱い商品に綿製品だけでなく、毛製品もかなり加わってきている。

〔大正14年〕

自転車も大正5年からずっと所持しているが、この頃は役場へ届け鑑札を後尾につけていて、自転車税を取られていた<sup>22)</sup>。現在の自動車税と言えよう。資産として2台で70円とあり、1台35円とすると、大正15年の大卒初任給<sup>23)</sup>（三井銀行80円）の44%であり、現代の約8万円（平成3年の大卒初任給約

18万円<sup>24)</sup>に近い金額となる。

また、「日本足袋株式会社」とも取引を始めた。この会社は、後にゴム底足袋を製造し、そのゴムから自動車タイヤへと発展させた「ブリヂストン<sup>25)</sup>タイヤ株式会社」の前身である。

〔大正15年〕

資産に「株券利子及び地代未収分」という項目がみられることから、初めて本業の利益ではなく「営業外収益」ができたことがわかる。

負債には「支払手形未払分」とあり、銀行取引に手形を使用し始めたことがうかがえる。

〔昭和2年〕

株式投資も「台湾電力」の他、「富士紡績」「東京電燈」と増えた。

〔昭和3年〕

帽子問屋への買掛けが初めて載っている。

株式投資は4社になる。

〔昭和4～7年〕

昭和4年に資産として電話の権利が記してある。当時の電話普及状態は昭和5年で全国総世帯数の5.6%、同15年でも7.3%<sup>26)</sup>である。全国的にまだ一般家庭までは普及していないようである。

昭和6年に自転車が「3台120円」となる。

昭和4～7年にかけて洋装品の種類が急に多くなってきた。

〔昭和8年〕

この年から松下電器の代理店を始めた。ランプ、電池、電球など扱っている。

〔昭和9年〕

得意先売掛代金が前年度の2倍となり、商売が益々繁昌している。

〔昭和10年〕

資産の中に生命保険の「愛国生命」、積立ての一つに「富国徴兵積立」とあり、時代を反映している商品名である。

株式投資は6社。

〔昭和11年〕

株式投資は10社となる。

〔昭和12～15年〕

昭和12年は棚卸決算簿に「海軍航空隊建設により創業以来の利益金」と記されており、特需景気により町全体の景気がよかったようである。

12年以降は『カタカナ』の商品名が多くなっている。

## 6. 在庫品名の変遷からみる洋風化

A商店は前述のように、最初は足袋製造をしつつ、他の商品も売っていたが次第に小売りに重点がおかれるようになった。その流れを取扱商品からみってみることにする。

棚卸決算簿には商品を項目別に分類して記入されている。但し、同じ商品でも年度により分類が異なるものがあるので、決算簿で用いられた項目名をまず簡単に大別して、取扱商品の移り変わりを示した。(表1)

この表から、大正前半は生地から仕立てて足袋を作るなど、自家製造中心である。大正後半からは、仕立てをあまりせず既製品を取り扱うようになる。そして、その頃洋品も多くなり、昭和にはいって、その種類も増加している。また、ゴム製の足袋の種類も豊富になった。

以上の項目名別だけでは、例えば「青縞」は大正10年以降項目名がないが、



表1 商品項目別分類

項目別	年	昭和5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	昭和2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
青 綿		●	●	●	●	●	●	●																		
仕立物		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
足袋（原料）		●	●	●	●	●	●	●	●	●																
足袋（既製品）							●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
メリヤス				●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
雑品・雑貨					●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
洋 品										●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
帽 子																●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
毛製品																		●	●	●	●	●	●	●	●	●
ゴム靴																			●	●	●	●	●	●	●	●
ゴム足袋・地下足袋																●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ナショナル代理部																			●	●	●	●	●	●	●	●

実際は各々の商品は少ない種類ながら、まだ扱われていた。また「洋品」というのは靴下やオーバーなど洋品的なものであるが、この靴下は大正6年から、オーバーに関しては大正11年から扱われている。つまり項目名として書かれている時が、その商品が大きなウエイトを占めていた時期だと考えられる。よって以上の項目名別だけでは大まかな変遷しかわからないため、次に年度別に実際の主な商品名について決算簿から解読できたものをまとめて記載した。ゴシック体で記してあるものは、以下に特筆したものである。(表2)

大正時代は足袋製品（自家製，原料），反物・生地，下着類が主流である。昭和になってもそれらは依然売られているが，その他もっと日常の他の衣料，履物・靴下，学生関係のものの方が多くなってきた。

まず下着類では、「シャツ」「股引き」「サル又」「襦袢」「腰巻」「パッチ」などがみられるが，昭和にはいると「ズロース」が現れる。ズロースは洋装の時着用するものであるが，ここでようやくこの町にも洋装化の波が到来しているようである。同時にセーラー服もズロースと同じ頃に現れているので，女子の学生服がズロース普及の一端を担っているように思われる。

表2 年度別主な商品名一覧

年	大正5～9	大正10～14	大正15～昭和5	昭和6～10	昭和11～15
足 袋	・自家製品 ・原料	・自家製品 ・原料 ・既製品	・既製品(普通足袋、毛足袋、ゴム足袋、地下足袋)	・既製品	・既製品
反物・生地	晒、キヤラコ、芯地、極薄物、コール天、西陣、捺染物、綿ネル、サージ、別珍	晒、キヤラコ、ネル、コール天、別珍	極薄、コール天、ポプリン、小倉霜降		
下 着 類	シャツ、股引、サル又、襦袢、腰巻、パッチ、メリヤス製品、ネル	シャツ、股引、襦袢、パッチ、サル又、腰巻、ズボン下、キヤラコ、アンダー、小倉	シャツ、股引、メリヤス製品、アンダー、パッチ、サル又、パンツ、ラクダ製品、襦袢、ステテコ、キヤラコ、スロース、ブルマ、ワイシャツ、サージ、毛晒	シャツ、股引、アンダー、パッチ、サル又、パンツ、スロース、ブルマ、腰巻、襦袢、ラクダ製品、ワイシャツ	シャツ、股引、アンダー、パッチ、サル又、スロース、パンツ、ワイシャツ、腹巻、襦袢、シミーズ、ガーゼ肌着、メリヤス製品、キヤラコ製品、ラクダ製品
上 着 類	ズボン、半袖、小袖	ズボン、半ズボン、ラクダ製品、セーター、オーバー、赤レイン	ズボン、半ズボン、オーバー、チョッキ、マント、トンビ、防水マント、スカート、女鷹服、ランニング、男子洋服、子供洋服	ズボン、半ズボン、女唐服、防水マント、毛オーバー、スカート、ジャンパー、チョッキ、子供洋服、文化コート、毛婦人着、スキー服、毛晒半袖	ズボン、女唐服、オーバー、文化コート、スカート、トックリ、チョッキ、セーター、子供服、女唐ステータ、毛羽織、ベビー服、ジャンパー
日常衣料	寝巻、西洋前掛、割烹着、手拭、半カチ、タオル、紐、カバー、バンド	寝巻、割烹着、前掛、エプロン、手拭、半カチ、タオル、湯上げタオル、敷布、軍手、頭巾、手袋、ヨダレ拭、カバー、カラー、ペーチ	手拭、タオル、半カチ、割烹着、エプロン、前掛、タオルヨダレ、湯上げ、帽子、ショール、海水着、バンド、レース、ネクタイ、マフラ、ボタン、ズボン釣、腕止め、手袋、男エリ巻、カラー、ソフト	手拭、タオル、半カチ、湯上げタオル、割烹着、カフェーエプロン、エプロン、西洋前掛、敷布、毛布、軍手、手袋、帽子、女唐洋傘、女唐海水、襟巻、作業着、エリ毛皮、フード、よだれ、バンド、ズボン釣、カラー、ショール、ケープ、オムツカバー、男エリ巻、カバー	タオル、割烹着、前掛、エプロン、帽子、パチヤマ、海水着、作業着、敷布、腹巻、帽子ヒモ、湯上げ、よだれ掛、オムツカバー、カラー、バンド、ズボン釣、羽織ヒモ、ショール、ネクタイ、マフラ、エリ巻
靴下・履物	靴下、カラゲなし、ゲートル、ゴム靴	毛短、靴下、ゲートル、靴下止め、ガーター	靴下、靴下止め、長靴、ガーター、ゲートル、スリッパ、運動靴、靴へら、靴ヒモ、靴墨	靴下、靴下止め、運動靴、ゲートル、スリッパ、アジア靴、靴紐、靴下カバー、長靴、革履袋、靴墨、皮靴	靴下、靴下止め、雨靴、ゴム長、スリッパ、ゲートル、ガーター、皮革、運動靴、ベビー靴、革履袋、靴墨
学生関係			学生服、学生カバン、セーラー	学生帽、幼稚園帽、学生服、学生カバン	学生服、学生帽子、セーラー服、運動着、学生外套、高等科用学生服、ランドセル、学生カバン
そ の 他		風呂敷	風呂敷、針	手提げカバン、マクラ、ウィンドー店飾り、国旗、海軍服、マスク、ナショナル製品	男洋傘、女唐洋傘、カバン、リュックサック、手提カバン、防護服、訓練服、ガマ口、風呂敷、マスク、ハンモック、水筒、ウデ輪、国旗、空気枕

上着類では綿製品が多いが、昭和に入って、ようやく「男子洋服」「子供洋服」と洋服がでてくる。女子は「女唐服（めとうふく）」と記載されており、「唐物屋」の『唐』、すなわち西洋などの外国の意がここで関係しているようである。さらに昭和6年には「毛オーバー」「毛婦人服」「毛晒半袖」と「羊毛品」の記入が多くなっている。

日常衣料では、大正6年に「西洋前掛」とあり、大正14年によく「前掛」「エプロン」となっている。また昭和6年に「カフェエプロン」とあるが、これは当時のミルクホールやカフェの女給が用いた胸当付のものではないだろうか。

帽子は、昭和にはいつからでてくるが、昭和3年は「夏帽子」だけの記載が、5年になると「中折」「子供」「女唐」「毛糸」「鳥打」「学生帽」と品種が増し、13年には「ベレー」「パナマ」「マニラ」「ストロー帽子」と『カタカナ』製品が目立つ。「ストロー帽子」は麦藁帽子のことだと思われるが、あえてカタカナを用いることをあけても、これも洋風化の一端といえようか。

履物類では、A商店は元は足袋屋から始まったので、足袋の販売はずっと続いていたが、一方で靴下も扱っており、履物に関しては初めから和洋折衷であった。ところが昭和に入り靴下の扱い量が増えると同時に、靴下を履いて用いる履物関係の「スリッパ」「運動靴」「靴へら」「靴ヒモ」などの品種がでてきている。

また、持ち物では「風呂敷」は大正時代からあるものの、「手提げカバン」は昭和6年からである。大正の婦人は風呂敷包みの他に手提げの時代といわれるが、この決算簿<sup>27)</sup>で見ると限りまだ風呂敷の需要の方が多かったようである。

昭和8年からは、ナショナルの代理店を始め「ナショナル代理部」としてランプ、電池が記載され、もはや衣類だけではなくてきたようである。他に「国旗」「水筒」「リュックサック」という商品名も昭和8年以降にあり、雑貨店的な要素が多くなっている。

A商店は唯一足袋だけは25年間ずっと扱っているが、最初は原料を用いて

の足袋製造中心だったのが、大正10～13年頃を境に小売り中心となってきたことがわかる。中には全く別の商売に転身した足袋職人が多い中、このA商店は元来の商品を基礎として徐々に小売業すなわち唐物屋、洋品屋へと転身拡大していったことがはっきりした。

全体として和装物は、大正時代が中心だったが、同じ大正でも13年頃になると項目分類にも「洋品」とでてくるように、それまでメリヤスが主流だったのにその他の毛製品がみられ、洋品の種類が随分増えてきた。そしてさらに昭和に入って洋物が多くなり、昭和2年から「A洋品店」と改名したように、取り扱った商品種も多様化してきたことがわかる。

表3は、大正、昭和に路上で服装調査を行った時の洋装と和装の比の結果である。東京は銀座で行ったもので、大正時代は洋装化が盛んになるといわ

表3 路上服装調査——洋装と和装の比——

		男		女		(注)
		洋装	和装	洋装	和装	
東京	大正14	67	33	1	99	(1)
	昭和元	70	30	4	96	(2)
	昭和5	88	12	14	86	(3)
	昭和8	—	—	19	81	(4)
	昭和16	—	—	75	25	(5)
小樽	昭和3	—	—	0.0	99.	(6)
大阪	昭和16	—	—	48	52	(7)

(注)：

(1)今和次郎『考現学』ドメス出版1971. P. 70

(2)家庭総合研究会編『昭和家庭史年表』

河出書房新社1990. P. 8

(3)服装・風俗史編纂委員会『幕末・明治・大正・昭和服装で綴る日本の風俗史』中央文化出版1987. P. 228

(4)前掲(2)のP. 54

(5)前掲(3)

(6)前掲(1)のP. 202

(7)前掲(3)

28) れるが、実際、女性はほとんど和服である。昭和16年に洋装75%とあってもそのほとんどが職業婦人か学生であったという。さらに地方では東京よりも保守的で小樽では200～300人に1人の割合でしか洋服の人はいなかった。大阪も東京ほど洋装化が進んでいない。

結局、全体的には大正時代の洋装化といっても実際の庶民の服装はまだまだそこまで至っておらず、昭和に入ってから徐々に学生、職業婦人から浸透していったのが実情のようである。

そのような当時の社会の中で、A商店の在庫品種の流れを見る限り、銀座や大阪のような大都市に3～4年遅れて洋風化していったように思われる。それは木更津が地方都市といっても海、陸と両方から商業が発達し、東京にも近いことなどから、同じ『地方』でも小樽とはまた違った結果となった。つまり木更津のような地方都市でも洋風化の波は確実に進んでいたことがわかる。

## 7. 生活の洋風化

先にあげた25年間の生活全般の変遷の中から、特に時代の変化を示す指標として、生活の電化と自転車の普及について考察する。

生活の電化については、A商店が「松下電器ナショナル代理店」になった様子をみていき、自転車の普及については、A商店の自転車保有台数を見ながらその様子を観察する。

### 〔ナショナル代理店と電化生活の変化〕

A商店は昭和8年から松下電器と関係している。A商店の代理店とその扱った商品から、松下電器の社史と照らし合わせて大正・昭和初期の実際の電化生活をみてみよう。社史によれば(表4参照)、現代の松下電器産業(株)は大正7年に「松下電気器具製作所」として創立された。当時、一般家庭では、電灯が1, 2灯しかついていなかったで、この製作所では、「アタッチメントプラグ」というコードを延長して離れた場所に電灯をつける器具を安価で

表 4 松下電器産業㈱の歴史

大正5	『松下電氣器具製作所』創設 配線器具の[アタッチメントプラグ]考案 「二灯用差込みプラグ」改良 ↓ 東京方面の販売網を建設する [自転車用ランプ] 考案 ↓
大正12 3月	「砲弾型電池式自転車ランプ」を発売 点灯試験で直接小売店販売の販路を開拓する 新聞広告でランプの代理店を募集し、販路 を全国的に拡大 ↓ [角型の電池ランプ]考案 ↓
大正14	角型ランプに「ナショナル」の商標をつける ↓
昭和2 4月	同時にそれに用いる電池の販売も加速度的 に増える ↓
昭和5	ランプは月産10万個、乾電池も月50万個 ↓
同 年	ランプの販売は30万個に、乾電池も100万個と なり、発売当初からランプ代理店渡し1円25 銭から60銭に、電池25銭から16銭となる ↓
昭和6	乾電池も直営事業にする ↓
昭和10 12月	(個人経営から株式会社に改組し、『松下電 器産業㈱』となり、各事業部を9つの「分 社」とした。) ↓
昭和12	ランプ30銭、電池10銭に引き下げられ、日 用品として全国の家庭に普及

作ろうと計画した。これが当たり、大量に売れた。また、関西中心の販売から関東へ進出するのもこの頃である。

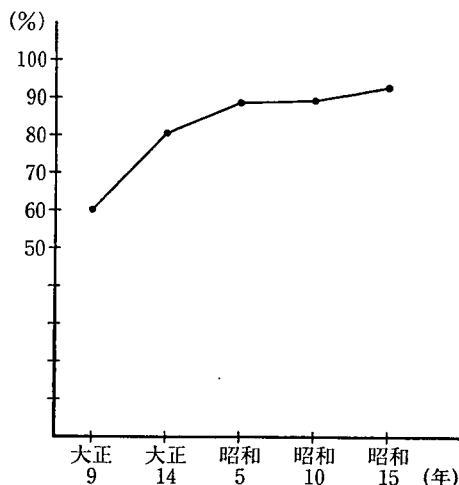
大正12年、当時としては画期的な自転車用の電池ランプを考案する。この頃自転車の夜間用灯火は、ローソクか石油ランプが大部分であり、電池式のものもあったが、寿命は2～3時間で故障も多く実用的ではなかった。その中で「砲弾型電池式自転車ランプ」(箱型をした懐中電灯)は画期的であったため成功し、ここで全国に販売路を設けるため「代理店」制度を実施し

た。この「代理店」とは、ここでは松下電器→代理店→小売店の位置にある。A商店はこの代理店を昭和8年から始めた。

その後、松下電器はさらに自転車用だけでなく、携帯自由な光源として「角型電池ランプ」を考案し、商標を「ナショナル」として現在までに至っている。ランプを使用する場合、電池を共に使用するため、電池の販売も大きく増加した。<sup>29)30)</sup>

表5は、A商店で扱った棚卸決算簿の「ナショナル代理部」の欄に記されている商品とその単価の一覧表である。「大型ランプ」「小型ランプ」がどの製品にあたるかは、これだけではわからないが、少なくとも品種として「ランプ」「電池」「豆球」「電球」は、前述した松下電器の当時の状況をそのまま反映している。

大正5年ではせいぜい家庭に1、2灯の電灯しかないと松下電器の社史に



資料：

- (①「全国世帯数」に対する②「電灯契約数」の割合)  
 ①：総務庁統計局『日本長期統計総覧第2巻』1988  
 ②：総務庁統計局『日本長期統計総覧第1巻』1988より作成

図3 電灯普及率

表5 A商店の取扱いナショナル製品と単価一覧表

	昭和8	昭和9	昭和10	昭和11	昭和12	昭和13	昭和14	昭和15
大型ランプ	45	48	48			40		
小型ランプ	30	33	33					
C型二号ランプ	70	50						
C型一号ランプ	45	35						
イエスランプ		55						
三Aランプ			35	27		22		
軍用ランプ			48	48		45		
エースランプ			50	48				
大型電池	15	15	15	15				
小型電池	10	10				10		
C型二号電池	25	25						
C型一号電池	13	13	13					
国勢電池		10						
イエス電池		22				11		
三A電池			10			11		
エース電池			19					
大豆球	2.5		2.5	2.5				
小豆球	2							
C型大球	44							
C型小球	4							
エース電球			3.5					
メーター	50							
ベル			25					

注) ①単価の金額単位は「銭」。

②昭和12,14,15年は商品名が記されておらず、棚卸金額の合計のみであった。

あるように、当時の電灯普及率をみると（図3）、大正9年には、まだ全国の60%世帯しか普及していない。ところが、昭和5年には90%近く達するようになり、その後は横ばいである。大正から徐々に便利な電化生活へと変化していく様子がうかがわれる。

当時代理店が全国各地に設けられていることから、全国的にこの状況は考えられ、流通の拡大化が生活をより便利にすることがはっきりわかる。

いずれも洋風化を先取りした必需品を取り扱うのが「唐物屋」の特徴であ



ることから、A商店が昭和8年から代理店を始めたのも、大正12年から10年を経て、この地方でも必要性が高まり、また逆に代理店を設置されたことにより、一地方でも電気利用の生活が活発になってきたという、相乗効果があったのではないかと考えられる。

### 〔自転車の普及〕

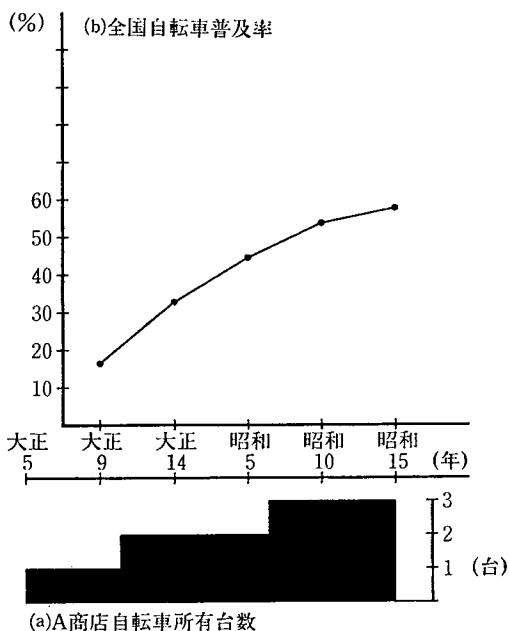
前述の25年間の状況にあるとおり、A商店では大正5年からずっと棚卸決算簿の「資産」の欄に「自転車」が記載されている。但し、台数とまとめた金額しか記されてなく、国産か外国産か、また種類も不明である。

棚卸決算簿によると、大正5～9年は1台、大正10年～昭和5年には2台、そして昭和6年以降は3台と増えていった（図4-(a)）。

当時の自転車の保有台数は大正5年の86万台から同15年の437万台と、5倍に増え、昭和14年には831万台に達する。<sup>31)</sup>所有世帯に対する普及率でみると、大正9年は18.3%だったものが、昭和15年は過半数以上の世帯で所有していたことになる（図4-(b)）。

ただ、当時自転車を所有している人は「自転車税」が地方税としてかけられており、昭和初期は、自転車1台につき本税・付加税合わせて年額平均8<sup>32)</sup>円であった。A商店では昭和6年の「資産」に「3台 120円」とある。これだと自転車税は3台分で24円であり、それは自転車資産価格に対して20%の値となる。よって自転車が大衆化しつつある一方で税金を支払えない階級も増え、税廃減運動も起ったといわれている。<sup>33)</sup>

しかし、自転車税がかかるにしてもA商店は3台も所有しているのをみると、それだけ大正から昭和初期において、自転車は人々の商売や通勤・通学用の足として生活に欠かせないものになってきているのではないだろうか。また昭和元年の交通調査の資料をみても、交通手段として自転車が48%と過半数を占めている。<sup>34)</sup>



資料：[図 4 - (b)]について

(①「全国世帯数」に対する②「自転車保有台数」の割合)

①：総務庁統計局『日本長期統計総覧第 2 巻』1988

②：財団法人自転車産業振興会『自転車の一世紀』1973より作成

図 4 自転車の普及

## 8. 終わりに

大正から昭和初期までの唐物屋の棚卸決算簿を通して、人々の生活における洋風化への変遷をみることを目的に考察してきた。

A商店は、大正5年から同10年までは「反物」「仕立て」とあるなど、家内工業的でようやく機械を導入し、合理化を図ろうとしている。

大正10年から大正末には徐々に洋品が取り上げられてきており、足袋も自家製造から小売り中心となる。作るより仕入れて売った方が、より効率的で

あることと、逆に洋品へと転換するため、あえて足袋製造の機械があるにもかかわらず製造を行わなかったのかもしれない。それだけにA商店は洋品への転換の必要性を察知していたのであろう。

昭和に入ってA商店も「洋品店」と改称したように、昭和6年頃までの5年間で25年間のなかでも一番大きく商品内容が転換したようにみえる。その後は衣料品だけでなく、洋品雑貨の種類も多くなり、ナショナル代理店を始めるなど、多種多様にわたる商品を取扱っている。

明治期に文明開化が始まり、庶民が西洋のものを取り入れるようになってから、ちょうど半世紀経った頃のことである。

一般の日常生活においては、電灯普及率が、大正9年に60%で、昭和に入ってからようやく90%になったように、大正期はまだ生活そのものの基盤が洋風化への過渡期であった。女性の衣服についても、たしかに上流階級の婦人や、モボ・モガなどといわれた時代の先端をいく女性は、大正時代の洋風化の担い手であっただろう。しかし、実際、A商店の品揃えからみると、東京などの大都市よりやや遅れ気味ながら、この一地方都市の木更津でも昭和初期には、確実に多くの女性が洋装化に目を向けていたと考えられよう。

本研究は棚卸決算簿の情報の一面を利用したにすぎない。当時の生活を示す資料は極めて少ないことから、<sup>35)</sup> 今後は商品の価格面から、生活における経済的なアプローチが必要と思われる。

本報告をまとめるに当たり、貴重な資料を快くお貸し下さいましたA氏のご家族の方に感謝申し上げます。

また、ご指導頂きました本学の湯本和子教授、お茶の水女子大学生活科学部の御船美智子助教授にお礼申し上げます。

#### 注および引用文献

- 1) 今和次郎「東京銀座街風俗記録」『考現学』ドメス出版 1971 53～108頁  
(1925年調査の復刻版)

- 2) 大町敏子, 名取まつ子「小樽市大通服装調査」『考現学』ドメス出版 1971  
159～223頁 (1929年調査の復刻版)
- 3) 多田吉三「家計簿からみた生活の長期変動 その1～その3」『国民生活研究』  
第3巻 No. 2, 3, 4 国民生活研究所 1964
- 4) 横山光子「同一対象家計における消費構造の歴史的変化(1)～(6)」『杉野女子大  
学紀要』No. 7～12 1970～1975
- 5) 宮下美智子「明治一昭和期における一地主の家計」『大阪学芸大学 紀要』第6  
号 1957
- 6) 後藤和子「家計記録よりみた昭和戦前期における農家の消費構造」『岩手 大学  
教育学部研究年報』第40巻第1号 1980. 10
- 7) 御船美智子「家計簿からみた一教員の生活史」『共立女子大学家政学部 紀要』  
第34号 1988
- 8) 竹内重雄『大正あれこれ』国書刊行会 1987 66頁
- 9) 『日本大百科全書』第16巻 小学館 1987 794頁
- 10) 同上9)
- 11) 前掲8)
- 12) 前掲9)
- 13) 前掲8)
- 14) 木更津市編集委員会『木更津市史』第一法規出版 1972 3～4頁
- 15) 木更津市『木更津郷土史』木更津日報社 1952 2頁
- 16) 同上15) の169頁
- 17) 高崎繁雄『写真集明治大正昭和木更津』国書刊行会 1980
- 18) 岩崎爾郎『物価の世相100年』読売新聞社 1982 289頁(初任給の金額は三菱  
関係の会社)
- 19) 日本会社史全集刊行会『蛇の目ミシン工業創業五十年史』常盤書院 1977 147  
頁
- 20) 前掲18)
- 21) 大沢俊吉『行田足袋工業百年の歩み』行田足袋商工協同組合 1971 97頁
- 22) 佐野裕二『自転車文化史』文一総合出版 1980
- 23) 前掲18)
- 24) 労働省『賃金統計総覧 1992年度』86頁
- 25) ブリヂストンタイヤ㈱『ブリヂストンタイヤ五十年史』1982
- 26) 「全国の世帯数」: 総務庁統計局『日本長期統計総覧第1巻』1988 並びに「電

- 話加入数」：総務庁統計局『日本長期統計総覧第2巻』1988 を用いて算出
- 27) 増田太次郎『チラシ広告に見る大正の世相・風俗』ビジネス社 1986 177頁
  - 28) 中山千代『日本婦人洋装史』吉川弘文館 1987
  - 29) 松下電器産業㈱『松下電器五十年の略史』1968
  - 30) 松下電工㈱『松下電工50年史』1968
  - 31) 勸自転車産業振興会『自転車の一世紀』1968 285頁
  - 32) 同上31) の290頁
  - 33) 前掲31) の284～291頁
  - 34) 前掲31) の286～287頁
  - 35) 藤浪宇八郎「片町の藤浪むかし話」

(うちだ なおこ 本学助手・家庭生活科服飾研究室)